

『藝術新聞』 目録追補

——五〇四号・五六〇号・五八六号・六一一号——

泉 ひので 由美 (奈良工業高等専門学校)

一 『藝術新聞』の意義と既存目録

『藝術新聞』は、「文壇の趨勢其俛を移し植えたる新聞紙」(創刊号「発刊の言葉」 大正一四年一月二〇日)を標榜し純然たる文芸新聞として昭和戦前期に刊行された『文藝時報』(全一五〇号)の後継紙である。『文藝時報』の号数を継承した一五二号(昭和六年一月一日)から紙名を『藝術新聞』と改め、文芸のみならず芸術全般に亘る情報を盛り込み、週に一度発刊されていた。文学・美術・演劇・映画・音楽などのジャンルを網羅する本紙は昭和戦前期の芸術界の動向を知る上で極めて重要な資料である。

『藝術新聞』を所蔵する機関は限られており、所蔵号にも偏りがあるものの、諸氏による調査及び所収記事目録の作成が行われ、その概要が明らかになりつつある。その成果は左記の通りである。

- ① 青山毅「『藝術新聞』細目」(「ブックエンド通信」第七号、一九八二・二) ※泉注・五四四～五九八号の細目を収録
- ② 山内祥史「『藝術新聞』目録——自第一五一号至第三七二号(不揃)」(「神戸女学院大学論集」一九八九・二二)
- ③ 斎藤理生「『藝術新聞』目録——自第五九九号至第六三二号(不揃)」(『阪大近代文学研究』第一九号 二〇二一・三)

④ 斎藤理生「『資料紹介』『藝術新聞』目録——自第六三三号至第六七四号(不揃)」(『阪大近代文学研究』第二〇号 二〇二一・三)

①に紹介されているのは五四四～五九八号の細目なので、①④を合わせて一五一～三七二号、五四四～六七四号の内容が明らかにされたことになる。だが残る三七三～五四三号の所在は不明であり、目録の範囲内においても欠号は多い。

このたび、信州大学附属図書館蔵「石井鶴三関連資料」の中に『藝術新聞』が含まれていることが判明した。確認されたのは、五〇四・五六〇・五八六・六一一・六一九・六二五・六三一・六四二・六四七・六四九・六五〇・六五三・六六八・六七二号の合計十五点である。このうち、本稿では前記目録①③④に未採録の五〇四・五六〇・五八六・六一一号の内容を紹介し、断片的ではあるが、目録の欠号部分を埋める作業としたい。

細目の記述にあたって、従来の方針は「五百八十四号迄ある巻頭の時評、署名のあるもの(談、インタビューを含む)、ならびに人物評に限定し(略)署名がなくても私の主観で欠かすことが出来ないと判断したものは、採録」(目録①)すること、「署名のある文章に限定して紹介」(目録②)することとされており、目録③④も「各面の最初に記載された無署名の記事にも、できるだけ触れる」こと

以外は①②の方針に倣っているが、本稿においては紙幅の許す限り、内容の多少に関わらず記載記事の見出しを全て列挙することとする。署名・無署名の別に拘らず掲載記事を網羅することで発行当時の芸術界の動向をより詳細に把握することができると思われるのである。

なお個々の記事の内容について詳述することはできないが、特に注目すべきものを取り上げ、本稿末尾に簡単な考察を加えることとしたい。

二 『藝術新聞』細目(五〇四、五六〇、五八六、六一一号)

第五〇四号 昭和十五年一月二十六日 一二面

上野の盛典 盛況裡に前期^{第二部}を終り奉祝展愈々本舞台!

前期入場者総計十一万名に及ぶ

寛方面伯仏画個展 印度調日本調融合の妙

奉祝展審査主任玉堂波山両氏に決定

審査発表二十八、九両日

大塚工芸古今名幅陳列

中村塾献納画

就任に際して

三宮様の御台臨に光栄の美術協会展

総裁宮南嬢に賜謁

日本人形社作品公募

華岳個展

上野への第二陣祝展^{第四部}搬入終る 搬人文展凌駕の大盛況

五味清吉展青樹社に開催

親善人形贈呈 独伊両大使夫人に

玉水・郷陽人形展

小林彦三郎氏上高地滞在中

義と熱の知己 単独で恩師の建碑 芝山画伯の熱情

個展と画会に絡る挿話

彫塑家懇話会 近く結成の運び 廿二日各団代表者談合

有恒画伯歌舞伎装置

牧野虎雄氏 新作個展 銀座資生堂で

工芸家資格問題 関係各方面賛同 京都府最後の断

官展偏重主義に疑問

奉祝展不出品は「楠の若君」が原因 荻生天泉画伯の大犠牲

蒼穹賞授与式挙行

菊屋展 下旬二個展 吉岡憲個展 安倍次郎吉展

人形展PK人形クラブ

時局を反映 趣味の人草風画伯 戦闘帽も凛々しく

モンペの一隊引連れて活躍

奉祝展出品犠牲 日柳燕石像成就 星光氏の画業映画に登場

小早川氏個展

文壇は動く 全文壇の一元化を目指し 日本文藝中央会結成

各団体聯絡協議会に統合

少壮歌人蹶起 報国歌人会結成 歌壇新体制に共同邁進

一、金五千圓を貰つてくれぬ苦勞 お使番深田久彌氏弱る

中響演奏 日比谷公会堂で

展覧会

歌壇時評 変貌する歌壇

俳句新体制 日本の伝統固守 俳壇統合第一歩

二

二

二

三

三

三

三

三

四

四

四

四

四

四

五

五

五

五

六

六

六

六

六

六

七

無季、新傾向除外談合進展	七	明年度劇映画製作総数決定	十一
文藝推薦三作残る	七	幸四郎・吉右 梨園両家お目出度決定	十一
トルストイ卅年忌	七	阪妻病む	十一
文藝中央会声明発表	七	友邦共楽の集ひ お国自慢の競演	十一
案内 劇場 舞踊・音楽	七	大阪市興亜厚生大会 豪華版『国際厚生の夕』	十一
詩壇時評	八	毀誉褒貶	十二
管轄外の署から思はぬ出頭命令 金子洋文氏大泥棒に對面	八		
大阪に生れた文化向上運動	八		
週報 自十・一七至十・二二	八		
芸能報国へ 本月中に結成の国民文化聯盟	九		
審議委員一般から先出	九		
演技座「放浪記」上演	九		
河内山宗俊上演を禁止	九		
定員外入場者取締嚴重	九		
十一月狂言 歌舞伎座 有樂座	九		
外映の動き 米系映画各支社引揚げ噂取消す	十		
法人社員新体制協力表明	十		
文部省の発表推薦理由	十		
四映画会社合同 資本二百五十萬圓に	十		
大宝・南旺・宝塚・東発各社	十		
東宝超特作和製コンドル	十		
ターキー舞台へ	十		
新国劇十一月大阪へ	十		
各館収入調べ 有名映画は一日いくら儲ける？	十		
104050名 舞台の人気者に技芸証交付完了	十一		
菊五郎丈は二千六百番	十一		
		第五六〇号 昭和一七年四月四日 一二面	
		時評 征で行く作家	一
		文化翼賛 画期的な翼賛選挙に文化人の浸透行動	一
		政治面社会面に進出顯著	一
		社会教育面文化翼賛 映画を語る小山課長	一
		国民の使命把握に日本国史決定版 斯界の権威を委員に	一
		殊勲残し吉積少将情報局を去る	一
		一隅より	一
		再燃した：私小説論争をめぐる	一
		私小説論反省	二
		私小説論談義	二
		私小説について	二
		私小説的感想	三
		文学者の功罪	三
		消息	三
		小説の真髓(上) —— 文芸時評 ——	四
		俳壇協力会 皇国精神の発揚を期し 京都俳壇廿数派連結	四
		文芸欄締出しに季刊単行本登場 編輯委員それく決定	四
		評論家協会推薦	四

良き材料提供に一役買ふ作家達 ころがね会三月例会	四	小林彦三郎氏新作展	七
売れる 愛国色紙短冊	四	大日展同人に常岡文亀氏参加	七
作家の選ぶ道	五	紫峰版画展 秋保鉄太郎氏作	七
・日本国史の回想に・ 伝統精神辿る人々・	五	水彩画推奨 記録展 名古屋で開催	七
昭和二十年に出来る「日本科学史」 帝国学士院編纂進む	五	三巴会 旗上げ展	七
浅見氏を囲み 一杯会	五	十画伯出品 三春展 第三回展	七
翼賛選挙 映画の応援	五	花道展	七
英米デマ宣伝に喧嘩を買って出る レパルス号後日物語	五	連袖会展短評	七
文壇千一夜	五	パツセル画展	七
世界文化界短信(二月中旬より三月中旬)	五	萩谷巖個展	七
作陶閑談 火の表情	六	竹房齋花籠展	七
法隆寺の塔が消える	六	文景同人展	七
改造の爲め五ヶ年間解体 文部省で記録映画製作?	六	飛来窯芸展	七
東丘社合作プラン 十組十作の対策 各作屏風仕立て運搬	六	清風会竹器展	七
雨海氏個展に為山氏賛助出品 三十年振の公表	六	茶掛茶器展	七
半弓会 大家中堅網羅	六	鍛金協会展	七
新院展 受賞新同人	六	惺齋篆刻展	七
病軀を押して精進 大作に続いて個展開催	六	親燈社小品展	七
秋声画伯の異常な創作欲	六	新院展受賞及推挙	七
日本刀第七回展	六	美術展覧会評 春の青龍社展評(一)	七
展覧会案内	六	――鍛錬と類型化に就いて――	八
日本画院 第四回展開幕	七	―― 林那岐雄	八
熱情みせる美術創作展 第六回展開幕	七	―― 笙	八
翠嶂門の中堅拙以個展	七	東海林廣氏 初の個展	八
大阪女人展 第九回を重ね	七	日本画家報国会主催 軍用機献納展グラフ(其二)	九
璞友会第二回展	七	邦画一如会展評	九
		――商品性とゴマかしの上に――	九
		―― 遠山吉次郎	九

- 再建を目指して 文協が緊急理事会開く 三
 半島飾る国体明徴館の壁画 東西大家統々作品完成
 大観画伯はじめ廿二画伯執筆 四
 新興美術三幹部 突如新協に出品 内部の動揺表面化か 四
 西山翠嶂画伯 満洲献画完成 四
 異彩名流の出品に 話題賑ふ大輪展
 財閥の巨頭と華族出身 四
 松平康南氏個人展 四
 院展 京都展 秋日和に観客殺到 四
 三輪晁勢氏 南から帰る 四
 廿年目に復興の郷土に結ぶ芸術感 信濃美術協会復興展開く 四
 院展日本画所感(承前) 豊田豊 四
 新秋美術会 新鋭グラフ 五
 展覧会案内 五
 文化映画の統合 三社案に着落か 六
 松竹・東宝が放つ 航空映画の三大作 六
 近く公開の運びとならん 六
 満映と中華聯映も 「阿片戦争」撮影 今秋製作に着手 六
 映画寸言 六
 演劇界は雨後の筍 新生劇団続出す 六
 一段と当局の取締要望さる 七
 映画館の演劇興行は不可 日劇・国際予定を変更す 七
 旅路の果て 封切延期か 七
 衣笠貞之助 元気に帰京 七
 大映・大阪支店の機構を刷新整備す 愈よ全関西に乗出さん 七
 ニューズ一束 七
- 関西劇団 十月陣容決る 七
 小台・伊草美代志等 新劇団「焔座」を組織
 近く地方公演を開始せん 七
 十月東宝の新演伎座 出演者決る 七
 芸能者の心身鍛練 忠霊塔の勤勞奉仕
 十二月八日を期し 浪曲大東亜戦出ん 七
 各社が競つて製作に着手す
 大東亜戦争記録音盤 決戦譜アルバム 八
 キングが十二月八日に臨発 八
 一流俳優と外地 八
 報告号の歌 近くお耳へ 八
 徴兵制度実施の歌 半島若人に呼びかく 八
 轟の処女吹込 阿片戦争と決定 八
 楽聖列伝「シヨパン」(一) 微風房主人 八
 少国民進軍歌 発表会決定す 吹込はコロムビアが獲得 八
 大陸女性の婦人歌 キングが製作 八
 東京音楽学校卒業式 盛大厳守裡挙行さる 八
 恒例の卒業演奏会開催 八
 草間加壽子が処女吹込 八
 志壽太夫梅次両師 コ社専属となる 八
 「力と美」の音楽指導会 名古屋市中で挙行 八
- 第六二一号 昭和一八年四月三日 一〇面**
 文学者総力を挙げて 米英撃滅へと驀進!
 来る八日文学報国会大会開催 一
 大政翼賛会が開く初の全芸術家会議 文学に呼応する撃滅道 一

空襲下でも新聞は発行	一	文藝春秋編輯局長 齋藤龍太郎	三
情報局強化さる 大本営とも緊密化 総裁官房に審議室	一	板紙統制社長辞任	三
情報局分課規程の改正要点の種々	一	日配機構一部変更か 出版会と併行して	三
国民浪曲賞 受賞者決定	一	長流画塾献納画グラフ	四
藤島画伯年譜(中)	一	連日殺到溢るゝ観衆 玉堂塾の献画報国展	四
愛国百人一首に対する 巷間の希求の声々	二	崇高なる玉堂画伯の報国精神	四
文報の出版を各方面で期待	二	小磯良平画伯が美校講師に招聘さる	四
愛国百人一詩(三)	二	高島屋の新作色紙展 時を得て好評	四
漢詩漢文学部会の役員近く内定か 会長には市村鑽次郎氏	二	日滿華文化交流の第二回大東南宗展	五
開拓地への文学使節	二	東京を始めに各地で開催	五
若い陣営から(十二)	二	東光会第十一回展の受賞者決定さる	五
第二次特別攻撃隊の霊に捧ぐ	二	古川北華氏個人展	五
従来 of 仮名書きを決定的に統制す 大童の外国文学部会	二	美術作家協会 懇親会	五
献艦献金へ強烈な詩鈔	二	展覧会案内	五
岡崎壮太郎氏(訃報)	二	街頭個展評	五
雑誌の部数制限は行はず 紙数制限を断行か	三	東山魁夷 旅の写生展/古家正寿第二回個展	六
有力雑誌百頁前後に減頁?	三	中北支の工藝視察(九)	六
出版用紙は更に大巾の大削減か	三	第三十九回 太平洋画会展評	六
婦女界が身売り	三	京都洋画家聯盟 陸海軍献納画展	六
文協・田中常務理事 解散を機に辞任	三	京都新進作家 斗牛会展	六
常務辞任に伴ひ二三の殉職	三	大東亜戦下に於て 美術の進むべき道	六
文協解散式	三	会場にて 旺玄社会員座談会(皆見鵬三 三好俊一 小林喜代	七
書評 詩と郷土(長田恒雄著)	三	吉 岩井弥一郎 市村雄造 水戸範雄 沼田一郎 千木良富	七
新聞と出版の用紙関係	三	東京会の新作展 牛込「末よし」に開催	七
用紙共販社長辞任	三	会期は五月上旬の予定	七
南方土産話(上) 日本語の普及が何より緊急問題(談)	三		

新燈社春の展覧会 大阪三越に開催中

工芸会の献艦運動に 京都工芸家も合格

六月中旬に内示会を開催

大阪女流日本画展

静思氏個展

小出檜重氏の遺作鑑賞会

産業戦士へ贈画 西山画塾青甲社展

三月三十日より京都大丸で

春陽会搬入締切る

美術創作家協会第七回展覧会

音楽演奏会を各区に開催する 音楽愛好の耳を啓培

情報局賞 推薦六氏

文化中央聯盟の入選決定の舞踊賞

愛国百人一首の作曲家を訪ねて(一) 弘田龍太郎氏

音楽会社 南方進出

大衆演劇入選 優秀作品なく、五佳品

加藤夏子の紫葉会公演

前春秋社主 追善能決定

音楽会案内

特輯 戦時興行の行方(上)

国立劇場として演劇報国に邁進

娯楽は絶対が必要

真摯な作品を一本

戦時興行の実体(上) 昼間公演を排斥す

東劇春の芸能祭 華々しく開幕す

名題披露

七

ニュース一束
各劇団の性格調べ

映画直言

映画 四月の封切番組

大日本映画の新重役 七取締に二監査決定

新社長には菊池寛氏が就任

紅白交互続映興行 いよいよ実施さる

決戦下映画興行試鍊の秋

各スタアの感想記「むすめ」の出演に当つて

桃太郎と三四郎 近来の異色好取組品 結局東宝映画に凱歌

日映マニラ支局を移転

シンガポール総攻撃 セットの撮影開始

大阪志郎に讃辞 金子、青野の両氏が

「花咲く港」木下恵介氏の処女作で映画化する

伊賀山正徳氏「海ゆかば」の後任監督決る

「愛機南へ飛ぶ」○○校生徒が特別参加

劇映四本と文映四本

生フィルムの減少に伴ひ 今後の映画製作方針決る

三 記事に関する覚え書き

九

九

九

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

十

九

九

九

九

九

九

『芸術新聞』は五四三号発行(昭和十六年二月頃か)のち一旦
休刊に入り、再刊は昭和十六年十二月十三日発行の五四四号からと
なる。右で紹介した四点のうち、五〇四号は再刊前に発行されたも
のだが、「全芸術界に通ずる唯一の機関」(『文藝時報』一五〇号「社
告」、昭和五年二月二七日)という当初の姿勢どおり美術・文学・

演劇・映画の各ジャンルの情報が網羅されている。こうした姿勢は再刊後も「日本における唯一の総合芸術新聞として（略）本紙の編輯内容は、文学、美術、演劇、映画、音楽、舞踊、出版の各界に亘り、時に時事を論じ、また一般文化に及ぶ」（五四四号・「時評」再刊に際して）として引き継がれるが、再刊後は情報局や大政翼賛会との連携を強め、国策に添う形での記述が基本となる。こうした傾向はすでに五〇四号においても、「日本文芸中央会結成」（六面）、「報国歌人会結成」（同）、「芸能報国」へ 本月中に結成の国民文化聯盟」（九面）といった記事の性格に顕著である。

再刊前の一号分ではあるが、詳細が判明していない三七三〜五四三号の内容を推し量る指標の一つとしてここに示しておく。

文壇関連の話題で重要と思われるのは、五六〇号の特集「再燃した：私小説論争をめぐる」に寄稿された伊藤整・丹羽文雄・渋谷川驍・堀辰雄・上林暁らの言説である。記事には前置きとして次の様な文章が掲載されている。

数年前、長篇小説云々の呼称に問題とされた「私小説論」は、大東亜戦下、作家の自己潔斎、自己反省の呼声にふたゝび新（マ）たりに姿を浮び上らせて来た。問題の発端は丹羽文雄氏の「文藝」に発表せる「執筆開始」に私小説論に言及せるを、伊藤整氏が「知性」にこれが駁論連載、次いで、上林暁氏が「都新聞」紙上に両者に応酬したものの、「新潮」では五月号に「私小説論座談会」を掲載するといひ、論議区々となるを、本紙はここに各作家各論を蒐めて紙上討論となす。

ここに「論議区々」として挙げられた各論の書誌は次の通りである。

- ・丹羽文雄「執筆開始」（『文藝』10巻2号、昭和一七年二月一日）
- ・伊藤整「憂国の心と小説」（『知性』昭和一七年三月一日）
- ・上林暁「私小説論議」（『都新聞』昭和一七年三月一九〜二二日）
- ・「私小説論座談会」（上林暁・伊藤整・丹羽文雄）（『新潮』39巻5号、昭和一七年五月一日）

大東亜戦争の開戦に際し、丹羽が「執筆開始」で「十二月八日にぶつかつて、おさむい楽屋をさらけださずにはゐられなかつた」私小説を安易なものと批判したのに対し、伊藤は「憂国の心と小説」において「大東亜戦争に関する御詔勅を拝読し、日本人たるの意識が自分の中に新しく洗ひ出されるのを感じてから、私は、今こそ日本人に最も似つかはしい文学形式である私小説が、今までにあつた自己懺悔、自己潔斎の道をとほつて、我々の中にある憂国の心懐を積極的に吐露する方向へと展開されるべきであると考へるやうになつた」と反駁、これを受けて上林は『都新聞』に「私小説論議」を発表し、私小説排撃論と擁護論のはざままで「議論は議論として眺めながら、さういふ論議の外に立つて自分の文学を貫きたい」と中立的な立場を取る。『新潮』五月号の座談会は「強ひて氏（泉注・丹羽のこと）を反駁したいといふ気持にならず、逢つてよく話して見たといふ気持にさせられる」と述べた伊藤の希望が叶えられた形となるものである。この座談会直前の『藝術新聞』特集は、議論の当事者である丹羽・伊藤・上林のほか渋谷川驍・堀辰雄の私小説論も加えたものである。

この時期にこうした紙上特集が組まれたいきさつは詳らかではないが、伊藤の「藝術新聞の草田さんが見えて、私小説について何

か意見を述べよといふことである。草田氏は僕の処へ来る前に丹羽君のところへ、同じ問題について意見を^(マ)もめた」という述べからは、同紙の文壇動向に対する積極的な関心が看取される。丹羽と伊藤の「私小説」に対する見解は正反対のようにも見えるが、「十二月八日」の詔勅・開戦に対する心境の吐露を安易なものにすべきではないという点では両者の立場は同じであり、時局に慮る同紙の側面はこうした点にもうかがうことができよう。

本稿ではこれらの議論に関する詳細な検討・考察は割愛するが、『藝術新聞』に寄稿された五氏の各論は全集未収録のものも含まれており（管見の限りでは、全集収録が確認されるのは上林暁の言説のみである）、時勢下において再浮上した私小説議論の実態を把握する上で不可欠な資料だと思われる。

五八六号および六一一号は目録①と目録③で「欠号」とされているものである。戦局が進むにつれ記事の内容も「報国会」「翼賛会」に関連する記事が大部分を占めるようになることが明らかだが、出版用紙等物資不足の状況下にあっても、週一回のペースをほぼ崩すことなく同紙は刊行されており、戦前期の芸術各分野の動向を知る上で極めて重要な資料であることは間違いない。

なお目録③では六一九号・六二五号・六三一号はそれぞれ四面構成とされているが、「石井鶴三関連資料」として信州大学附属図書館に保管されている『藝術新聞』はいずれも八面構成である。紙面数の相違は落丁によるものか、それとも二種類の『藝術新聞』が存在していたことによるものかは定かではない。今後の調査に委ねたい。

*本研究はJSPS科研費（基盤研究C・課題番号20K00288、20K00346、22K00289）の助成を受けたものである。